国語A

（90分）

注意　解答はすべて解答用紙に記入すること

第一問

次の文章を読んで、後の問に答えよ（なお、設問の都合上、表記の一部を改めた）。（60点）

近世とは、時間の軸の上で見れば、とりあえず前近代の終わりと位置づけることができる。もちろん近世期の日本の社会にさまざまな近代化の様相が見られることは、今日常識に属するだろうが、にもかかわらずやはり明治は近代であり、江戸は前近代だった。

そもそも近代とは何の謂（いい）だろうか。単純に定義することなどできそうもないが、いま私たちのいるこの時点を近代の行き着いたところと考えるなら、とりあえず自分自身の実感に即した表現は可能かもしれない。私の実感でいうと、近代とは諸事象の産業化の時代であり、生産と消費の効率化を最大の目的とする社会である。私は政治とも経済とも縁遠い、文学に遊ぶ者だが、その文学において、あるいは遊びにおいて、そのことを日々痛感している。私たちにとって文学も遊びも、産業化された消費行動であることは確かなことだろう。そして、それが近代化の至り着いた果てであり、前近代には見られなかった現象だということも、ほぼ確実に思われる。

文章について考えてみよう。文章表現における生産・消費の効率化とは、まず表記・表現の均一化、そしてその単純化ということになろうか。ひらたくいえば、誰もが、いつでもどこでも容易に書け、容易に読める文章が近代的文章表現ということになる。

今日の文章表現をめぐる環境はその意味では安定し完成したもののように見える。たとえば小説・評論・新聞雑誌の記事・論説などといった諸ジャンルにおいて、とりたてていうほどの文体上の区別はないといってよいのではないか。むろんそれぞれの場に応じた調子や身構えに差はあるだろうが、語彙や文法、あるいは修辞的な要素に決定的な違いがあるとは思えない。

（中略）

さらに今日、詩や短歌や俳句といったジャンルにしたところで、その表現上の差異はきわめて小さい。専門にやっている人はともかくとして、素人が現代の短歌と俳句にその長さ以外の相違点を見出（みいだ）すことは困難だし（まして狂歌や川柳との区別な

どほとんど無意味に見える)、それは自由詩とくらべたときにもいえる。そして自由詩と散文は、行分けという視覚的な要素を別にすれば、これもほとんど見分けがつかないのではないか。実際、今日の私たちの書記言語による表現(広義の文章)は、きわめて均質なもので、語彙・表記・文法といった基本的な要素はほぼ共通しており、誰もが、特別な習練を積むことなく、どんなジャンルのテキストを書くこともできるのではなかろうか。

ごく稀に、たとえば法律の文章に文語体が残っていて話題になったりもするが、その際、法律の条文も口語体でわかりやすく書き改めるべきだ、というのが大方の論調であり、私たちの実感だろう。つまり、あらゆる文章表現はできるかぎり均質でわかりやすいものであることが、ほとんど自明のこととされているのである。

私たちはこうした状況を実に自然なことと受けとめているが、少し過去を振り返ってみれば、むしろきわめて不自然で特異な状況であることがわかる。そしてこれが、A文章表現において、近代が至り着いた地点なのである。

こうした私たちの居場所の特異さは、近世期をナガめれば、はっきりと見えてくるだろう。近世においては、まず、最も見やすいところで漢文という日本語の表記・表現法が大きな位置を占めていた。それは学術言語であるだけではなく、詩文において当時の文学をリードし、ときとしては日常の用にもあてられていたのである。一方で、もちろん漢字仮名まじりのいわゆる和漢混交文も用いられ、和漢混交の割合によってさまざまなレベルの文体があった。また、日常的な文章の代表ともいえる書簡においては、書簡だけに用いられる表現(いわゆる候文)があり、今日、近世の書簡を読もうとすると、その表記と文体の独特な特徴になじむことが要求される。文芸でいえば、和歌と俳諧とは語彙の体系を異にして、はっきりと棲み分けていたし(漢詩はいうまでもなかろう)、小説類もジャンルごとに特徴的な文体を持つのが常であり、つまりその内容によって文体が変わることが当然で、浮世草子と読本、あるいは読本と人情本とは一読ただちに区別可能である。そうしたジャンルごとに明確な文体があればこそ、狂詩・狂文・狂歌・川柳といったパロディ表現もまたジャンルとして形成されえたのである。

現在の私たちから見ると、近世の人々にとって何が自然な表現だったのだろうか、と途方にくれてしまう。なぜ無理をして

漢文を書き、和漢混交文を書き、候文を書き、俳諧や和歌のルールを学び、それをふまえてのパロディにいそしまねばならないのか、と。しかし、もしかしたら、こういういわば多言語状況[B]のほうが自然なのかもしれない。特に文学という遊びの領域においては、表現を均質化する必要は必ずしもないのだから。私たちが自然な表現と思っているものも、人工的につくりあげられてきたひとつの表現にすぎず、それがあたかも唯一の自然なあり方に見えるのは、相対化すべきほかの表現がないというだけなのかもしれない。

ともあれ、これが前近代としての近世の、文章表現にかかわる状況である。そして明治以後、文章表現は均質化へ向けて走りだした。

もちろん、現在の私たちの「自然な表現」が近代、つまり明治年間以後に突然あらわれたわけではなく、[C]むしろ明治は日本語の表現史上最も多様な文体が乱立した時代だったかもしれない。漢文・和文・言文一致といった諸文体はもちろん並立していたし、それらの内部でもさまざまな、ほとんどありとあらゆる試みがなされたとさえ思える。しかし、そうした乱立は乱立を求めたためではなく、統一的な表現・文体を求める過程としてあらわれた現象だったのである。したがって文章表現における近代とは、均一で容易な表現へ至る長い道のりだった、というべきかもしれない。たとえば当時の言文一致論やローマ字論(注1)は、その後に実現したか否かとにはかかわりなく、やはり明治・大正期に起こった美文運動(注2)よりはるかに重要である。つまり表現の効率化を目指すことが、近代における表現の最大の課題だったのだから。もちろん、それに対する反動もあったし、抵抗もあったわけだが、それはあくまでも反動にすぎず、乗り越えられるべき抵抗だった。大きな流れとして近代は、文章表現を均一化し単純化する方向へ進んだのである。　（中略）

こうして見てくると、文章表現における近代と前近代を分かつものは、多様な文体と均一な文体という事象ではなく、多様性を自明のことと考えるか、それを何とか均質化しようとするかという指向性の違いということになるだろう。

近代のそうした指向については、国家という均質化した空間を創るための規制ともいえるし、市民社会、民主的政体の成熟

のために必要だった、と考えることもできる。逆にいえば、あたりまえのことだが徳川幕藩体制は近代国家ではなかったし、前近代において個人の表現の必要と機会は近代に比してきわめて限定されたものであり、そこでは文章表現の効率化は緊急の課題とはならなかった。だからこそ、そこでは表現の多様性を自明のこととして受け入れ、決してそれを均質化しようとは考えなかったのである。

そうした意味で、文章表現の面から見て、近世はやはり前近代だ、というわけだが、一方それは単なる前近代ではなく、その「終わり」でもあった。[D] 終わり、ということの意味は、たまたま次に近代を迎えたということではない。

日本人が文字を手に入れて、文章表現がはじまってから、文章による表現の必要と機会は、はじめはごくゆっくりと、やがて加速度的に、より多くの人々をとらえ、拡大していった。言葉の表記・表現は、国家なら国家の強い意志が働かない限り均一化せず、むしろ多様化の方向へ進むだろう。時間軸に沿ってより多くの人が文字、そして文章を手にするようになり、それとともに表記・表現も多様化してゆくと考えられる。もっとも、日本語には漢字と仮名という独特の表記の問題があり、これが表現・文体の多様化と密接に結びついているわけだが、いまはそのことにはふれない。

文字の導入につぐ表現史の決定的な[2]ブンキテンは印刷・出版技術の導入であり、これは近世をいわば前近世と区分する重要な指標のひとつである。それは「文学」の産業化(生産・消費の効率化)、つまりは表現の均質化への道をひらくものであり、その意味では近世はそのはじまりから近代を内包していた。したがって、それはもはや前近代の「終わり」でしかありえなかったのである。ただ、それが必ずしも近代へと直結しなかったことも事実である。(中略)ともかく近世期には、印刷・出版によって文章表現は均一化せず、先に見たようにむしろなお多様化の道をたどった。

そこでは、多くの人々が、印刷出版物を主たる[3]バイカイにして文章表現に接し、少なからぬ人がそれに触発されて自らの表現へと向かったはずである。そして自分で表現するときに、何をどう表現するのかという問題に出会っただろう。明治近代とは違って、過去の文章を規範とすればよかったのだが、そこには漢文からさまざまな和漢混交文などいくつもの規範が並び

立っていた。もちろんそれらはジャンルや場面、書き手の階層などによって棲み分けていたから、通常はそれにしたがって規範を選べばよかった。しかし、近世は前近世に比して新しい社会であり、そこで人々は新しい階層を生み、新しい環境、新しい現実と出会ったのである。自分の依拠すべき規範が何なのかは、必ずしも自明ではなかった。そういう場面において、何らかの規範によりながらも、それまでにない新しい表現を模索する試みがなされた。西鶴、近松、芭蕉から秋成、蕪村、そして京伝、馬琴、南北といった人々がいずれも独自の文体・表現を生み出しつつ、それぞれに近世文学の諸ジャンルを形成していったことを思い出せばいいだろう。

一方、新しい表現がある程度確立されると、今度はそれが強い規制ともなった。もともと古い規範を尊重することが基本にあり、そしてさまざまな表現が乱立したために、かえってあるジャンルが確定するとそこでは表現も固定し、それによって自分のテリトリーを主張したからである。西鶴も芭蕉も馬琴も、多くのエピゴーネン(注3)を生み、そしてそれによってむしろ彼らのつくりあげたジャンルが衰退したことを想起しよう。

つまり近世期は、自由で多様な表現を生み出した一方で、硬直したチンプ[4]な表現をも数限りなく生み出した。近世文学史とは、おおむねそうした、新しい表現の模索と獲得→そのエピゴーネンによる表現のケイガイカ[5]というかたちでのジャンルの盛衰から成り立っているのである。

（風間誠史『近世和文の世界――蒿蹊・綾足・秋成』による）

（注）1　ローマ字論――日本語の表記をローマ字に統一しようとする論。
2　美文運動――古典の形式にのっとり、美しい語句や修辞を巧みに用いて文章を書こうとする運動。
3　エピゴーネン――亜流。模倣者。追随者。

問一　傍線部1～5のカタカナを漢字に書き改めよ。

問二　傍線部A「文章表現において、近代が至り着いた地点」とは、どのような状況か、説明せよ。

問三　傍線部B「多言語状況」とは、どのようなものか、二五字以内で説明せよ。

問四　傍線部C「むしろ明治は日本語の表現史上最も多様な文体が乱立した時代だったかもしれない」とあるが、こうした文体の状況にあった明治をなぜ「近代」として捉えることができるのか、筆者の考える文章表現における近代性を踏まえて七〇字以内で説明せよ。

問五　傍線部D「それは単なる前近代ではなく、その「終わり」でもあった」とは、どういうことか、「近代」「前近代」「近世」という語句を使って九〇字以内で説明せよ。

問六　本文の内容と合致するものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　現代において、私たちは様々なジャンルの文体をことさら区別せず、どのようなジャンルであれ、万人が簡単に理解できる書記言語で文章が記されることを当然視しているが、それは近代化の所産であり、明治期を中心に展開した言文一致論やローマ字論、および美文運動が目指した理念でもあった。

イ　近世期には、漢文という文章表現が学問や文芸、ときには日常生活の中で大きな比重を担っており、そのほかにも和漢混交文や候文なども存在していたが、それらの文体は人工的につくりあげられた文章表現であって、中には文語体も含まれているため、現代の私たちの目には不自然に映ってしまう。

ウ　明治期には、生産と消費の効率化を最大の目的とする近代国家の創設を成し遂げるために、国家の強い意志のもと、文章表現における多様性が一貫して否定され続け、それへの反発もなかったが、その中で個人の表現の必要と機会に対しても国の行き届いた配慮がなされ、あらゆる人々の個性が尊重される時代となった。

エ　明治近代とは異なり、近世期の人々には古い規範を尊ぶという基本的な姿勢があり、自らの表現を模索する際にも過去の文章をまずは規範としたが、そうした中で生まれた狂歌や川柳などのパロディ表現は過去の規範を批判するねらいで制作され、新しいジャンルを形成しえた一方で、一時的な流行にとどまった。

オ　近世期には、印刷・出版という新たなメディアが登場し、その中で前近世とは異なる独自のジャンルや表現が西鶴や近松などによって作り出され、文章表現はさらに多様化したが、その新しいジャンルの型がいくらか定まると表現も固定化し、また多くの追随者も登場したことで、むしろジャンルの衰退へとつながる側面もあった。

第二問　次の文章を読んで、後の問に答えよ（なお、設問の都合上、表記の一部を改めた）。（60点）

「さあ、如何なさいますか」

眼前の女は、幾度目かの問いを投げかけた。玲瓏な声である。美しいのは声だけではない。切れ長の目は涼やかで、鼻梁は墨壺（注1）で線を引いたように顔の中心を走っている。紅を引いておらずとも薄い唇は赤く、肌は絹の如くきめ細やかで白い。板張りの広間に、二人を取り囲むように行燈が並んでいる。故に部屋の隅は闇がへばりついており、中央だけが茫と明るいという有様である。

――どれほど経ったか。

与根は1ノドの渇きを感じ、ふと思った。森に足を踏み入れた時、すでに陽は沈み果て、西の空は茜色に、A高くなるにつれて藍が漸増していた。何故、このような時刻に森に入ったか。これまで昼間に入ってみたが、爺様が見たという古ぼけた寺は一向に見つからなかった。よくよく問い詰めると、爺様はその時は辺りがすでに暗くなっていたことを思い出した。これが関わっているのではないかと、試してみたところ見事に思惑は的中し、この古ぼけた寺を見つけたという訳である。この場所には確かに昼間にも来た。鬱蒼と生い茂る森の中、誰かが手を加えたようには見えぬのに、木々が何か得体の知れぬものを避けているかの如く開けていた場所だったのでよく覚えている。そこに、寺はあった。昼にはなく、夜にはあった。怪奇には違いないのだが、与根はさして驚くことはなかった。この一連の件、恐らくは、

――妖の類だろう。

と、感じていたから。そうでなければ辻褄の合わぬことばかり。その証左に己たちを取り囲む行燈の火も一切油を差し継ぎもしないのに、ちろちろと火は揺れ続けている。

「お選び下さい」

女、いや雀子は再び囁くように言った。その折、ふっと頬を緩める様は、女の己から見ても艶やかである。常の者なら

ば、妖の類だと解っていれば身の毛もよだつ思いであろう。が、与根の心に沸き上がるのは恐怖ではなく、B別の感情であった。

与根は隣村の庄屋の家に生を受けた。男三人、女四人の下から二番目である。

幾ら暮らしに余裕があるとて限界はあり、七人もの子をずっと家に置いておく訳にはいかぬ。長男は跡取りに、次男は分家させ、三男は長男の手伝いに家に残す。女たちは皆、いずれは他の家に嫁ぐ運命であった。姉妹の中で、与根は飛びぬけて器量が良かった。近郷から若い衆が一目見ようと訪れるものもしばしば。そのような次第であったから、与根も自らの2ビボウを自負するようになり、姉妹の中で、

――最もよい嫁ぎ先に。

と、内心で決めていた。そして、与根が嫁いだのは少し離れた庄屋の家。実家と同じ庄屋とはいえ、身代(注2)は五倍以上である。他の姉妹は最も良い者で実家と同程度、悪いものならば身代の小さな百姓の後妻に収まっている。

夫は人の善いだけの盆暗であった。しかも子が生まれなかったが、追い出されることはなかった。この身代で実は分家筋。本家があるため別に拘らぬという考えの人だったのだ。これは与根にとっては好都合で、自儘に家の銭を使うことが出来た。美しさを保つため、着物、化粧には3メッポウ金を掛け続けたのだ。

4幾セイソウの時が過ぎ、夫婦共に歳を食うた。歳を取るごとに白髪も皺も増える。田畑を売って着物や白粉を買うが、それでも銭は底をつきかけ、とてもではないが追いつかない。

与根が絶望に暮れていた半年前、姿を見せたのがこの雀子であった。父母に早くに先立たれて家業の行商を継ぎ、この村に来たという触れ込みである。

美しい女である。爺様が酷く気に入った。やがて爺様は行く当てが無いならばと逗留させ、さらに一月も経つと養女にするとまで言い出したのである。猛反対するが爺様は聞き入れない。夫婦で激しく口論している時、雀子は与根だけに見えるように、ちろりと舌を出した。

――この女、家を乗っ取るつもりじゃ。

与根は確信した。爺様が留守の折、与根は雀子に魂胆は何かと迫った。雀子は思惑などないと言い張る。やがて与根が激昂(げきこう)して摑(つか)み掛かると、雀子は生意気にも頬をぶってきた。

与根は我を忘れ、近くに置きっぱなしになっていた鋏(はさみ)を摑んで振り回した。殺すつもりなどはなかった。ただ追い出せれば。鋏は雀子の口の辺りを掠(かす)めた。丁度、何か反論しようとしていた最中であったため、雀子は舌を切って、ぼたぼたと口から血を流した。雀子はきっと睨(にら)みつけて家を出ると、もう二度と戻らなかったのである。雀子は次の村に行くと出たと告げたが、爺様は半信半疑で嘆き、翌日から雀子を探した。それを与根は冷ややかに見るだけであった。C己は家を守ったのだ。

十日、二十日、一月した頃、爺様が小さな葛籠(つづら)(注3)を持って帰って来た。何と雀子に会えたという。そして二度と会えぬが世話になった御礼(おれい)に、大小二つの葛籠から一つを贈りたいと話したらしい。それを家で開いてみると、中から大判小判が山ほど出て来たのである。

「これは、おかしい」

与根はすぐに零(こぼ)した。先ほどまで葛籠は空の如く軽かった。それが蓋を開ければこの有様。気になって雀子のことを聞いてみたが、村の者は誰一人見たものはいないという。これで与根は雀子が妖の類ではないかと疑った。ならば大きな葛籠を得れば、もっと金が手に入るのではないかとも――。

与根はこうして、この寺を訪れたという訳である。まず、与根は雀子に会うなり詫(わ)びた。雀子は意外なほどあっさりと許し、

「こちらこそ、甘えて身の程を知らぬ振る舞いを取ってしまいました」

と、反対に謝ったほどである。だが、与根がここに来た真意は察しが付いていたようで、

「葛籠でございましょう」

と、薄く不気味な笑みを見せた。与根は正直に頷(うなず)く。いや、そうせざるを得ない、不思議な威厳を雀子から感じたというのが適当である。

「実はこの葛籠、ただの大小という訳ではありませぬ。一つは正魂の葛籠、今一つは反魂の葛籠と申します」

いわく、正魂の葛籠を善なる者が空ければ金銀が出て、悪しき者が空ければ刃が飛び出て椿の花が地に落ちるかのように首を刈るという。一方、反魂の葛籠は逆さま。善なる心を凶刃に変え、悪しき心を財宝に変えるというのだ。そして、爺様には葛籠の正反は教えたが、与根には自ら答えを導き出して欲しいと雀子は言うのだ。与根は悩んで来た。どちらが正反の葛籠かということではない。あの人が善いだけの爺様が小さな葛籠を空け、大判小判が詰まっていたのだ。小さな葛籠が正魂の葛籠で間違いない。与根が迷ったのは、

――己が悪しき者かどうか。

ということである。悪しき者ならば反魂の葛籠、つまり大きな方を選ぶのがよい。ただ己が真に悪しき者か。確かに家の金を散財したし、雀子に家が乗っ取られることを危惧して傷付けた。だが、世には戦を起こして幾千、幾万の人を殺すような者もいるのだ。安易に己を、己の一生を悪とは決め切れなかった。

「さあ、早く」

雀子に再び迫られた時、与根は腹を決めた。大きな葛籠に手を掛けたのである。

「真にそちらで？」

与根は頷く。己は少なくとも善人ではない。自らよりも容姿が劣り、身代の小さな家に嫁いだ姉妹をこの老境にあってさえ侮っている。己を見つめ、与根はそう結論を出した。

「どうぞ」

そう促されてしまったため、与根は思わず葛籠を持ち換えることなくその場で開いた。その刹那、与根の目には淡い滲むように光る床が飛び込んで来た。

「私は善人……」

首が落ちているにも関わらず、妖の力のせいか未だ声が出た。己は間違いなく反魂の葛籠を選んだ。それなのにこの有様。

つまり己は善人だったということになる。

「いいえ、貴女は紛うことなき悪人です。こちらが正魂の葛籠ですもの」

「まさか……」

ということは、爺様が選んだのは反魂の葛籠であったということ。つまり爺様は悪人だったということになる。

「自らが悪人だと思い、反魂の葛籠を選んだという訳です」

「何故……こんなことを……」

そもそも何故、己たちに近付いたのかということである。

「お察しの通り私は妖です。雀のね」

爺様が子どもの頃、男の子四人で雀を嬲り殺した。爺様は見ていただけ。加わることはなかったが、助けることも無かったという。死んだ雀は雀子の親だという。その四人はすでに呪い殺したらしいが、爺様の処遇を迷った。故に生き残る機会を与えたらしい。

「折角……認めたのに……」

瞼が激しく震えて間もなく閉じようとする中、与根が絞るように言うと、雀子はあの時のようにちろりと舌を出し、

D「ねえ」

5 とアイマイな返事を残し、深い闇の中に姿を溶かしていった。

（今村翔吾「葛籠」による）

（注）1　墨壺――大工や石工などが直線を引くのに用いる道具。

2　身代――家の財産

3　葛籠――藤づるなどを編んで作った蓋付きのかご。

問一　傍線部1～5のカタカナを漢字に書き改めよ。

問二　傍線部A「高くなるにつれて藍が漸増していた」とは、どのような情景を描写したものか、四〇字以内で説明せよ。

問三　傍線部B「別の感情」とは、どのような感情か、二〇字以内で説明せよ。

問四　傍線部C「己は家を守ったのだ」とあるが、つまるところ何を守ろうとしたということなのか、一五字以内で説明せよ。

問五　傍線部D「「ねえ」」について、次の問いに答えよ。

(1)　「ねえ」という終助詞の文法的な機能を説明したものとして最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　相手を引き込むような気持ちで注意を引きつける。

イ　相手の気持ちをくみ取って同意の態度を示す。

ウ　依頼や勧誘に親しみの気持ちを添える。

エ　親しみの気持ちを込めた確認を表す。

オ　一方的にこちらの気持ちを伝え突き放す。

(2)　この「ねえ」という発言によって、読者の中にどういう問いが際立つことになるか、次の空欄に二〇字以内の疑問文を記述して説明を完成しなさい。

[　　]という問い

問六　この作品は、読者が舌切り雀の話(宝の入った葛籠を雀から手に入れた正直なじいさんの話を聞いて、強欲なばあさんが大きな葛籠を手に入れてひどい目に遭うという話)を想起しながら読むだろうことを考慮して書かれていると考えられる。この作品では、読者は誰の視点でどのように読み進めていき、どのような意外性に向き合うことになるのかを説明せよ。

第三問

次の文章は、少将藤原高光と周囲の人々をめぐる物語の冒頭部である。これを読んで、後の問に答えよ（なお、設問の都合上、原文の表記を一部改めた）。（40点）

（注1）A もとよりかかる御心ありけれど、父大臣おはしけるほどは、制しきこえ給ひければ、え思し立たざりけれど、失せ給ひて後、腹々（注2）の君たちは、皆心とおはしませば、大臣おはしまさねども、殊（こと）にものしき（注3）事もなし。この斎宮の宮の御腹の女君は、まだともかくもなくて（注4）、大臣のかしづき給ひしにかかりておはせしに、さもあらねば、ただこの御兄人（せうと）たちをむつましきものに語らひきこえ給ひて、世の中のあはれなることを思しを見たてまつり給ふを、片時見たてまつらではえおはしますまじけれど、もとよりかかる御心ありけるうちに、御乳母おはしけれど、それも里住みにて（注5）、殊なる事もなくて、よろづのこと心細くおぼえ給ふままに、ただこのことのみ御心に急がれ給ひつつ、出で給ふたびごとには、女君に「法師になりに、山へまかるぞ」と聞こえ給ひければ、「例のこと」と、戯れに思してなむ聞こえ給ひける。「まことに、このたびは」と聞こえ給ひければ、「例の夜さりは、帰り給ふらむをこそは、法師かへるとは見め（注6）」と聞こえて笑ひ給ひければ、「まことにや」と聞こえて出で給ひければ、女君、「法師にならむと侍るは、我を厭（いと）ひ給ふなめり」とて、

あはれとも思はぬ山に君し入らば麓の草のB つゆと消ぬべし

と聞こえ給へば、高光の少将の君、

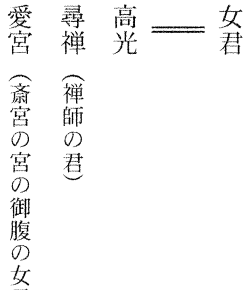
我が入らむ山の端になほかかりたれ思ひな入れC そつゆも忘れじ

と申し給ひて、愛宮の御もとに詣で給ひて、立ちながら出で給へば、「もの聞こえむ」とのたまひければ、D「などえ上り給はぬ」

と聞こえ給ひけれど、涙も出で給ひければ、「急ぎものへまかる」と聞こえ給ひて、殊なる事も聞こえ給はで出で給ひて、比叡に登り給ひて、御弟のおはしける室におはして、疾う禅師の君を召して、「頭剃れ」とのたまひければ、いとあさましくて、禅師の君、「などかくはのたまふ。御心変はりやし給へる」とて、のたまふままに泣き給ふ。

（『多武峯少将物語』による）

（系図）



（注）1　もとよりかかる御心ありけれど――ここでは、以前から高光に出家したいというお心があったけれど、ということ。

2　腹々の君たちは、皆心とおはしませば――他の方々がお生みになった子は、皆自分の考えで物事に対処できなさったので。

3　ものしき事――ここでは、心配なこと、困ることの意。

4　ともかくもなくて――どなたと結婚されるとも決まっていなくて。

5　里住みにて、殊なる事もなくて――自宅に住んでいていつも一緒にいるわけではないので、特に頼りになるということもなくて。

6　法師かへる――「尼かへる」という言葉が「尼が（出家するのをやめて俗世に）帰る」ことを「雨がえる」と揶揄するのと同様、「法師かへる」も「法師が帰る」ことを揶揄したものと考えられる。

問一　波線部1「かしづき」、2「あさましくて」について、現代語訳せよ。

問二　傍線部A「もとよりかかる御心ありけれど」について、以前から「かかる御心」があった様子が書かれている部分を本文中から四〇字以内で抜き出せ。

問三　傍線部B「つゆと消ぬべし」、傍線部C「つゆも忘れじ」という表現は、それぞれ誰が誰にどのような心情を伝えようとしたものか、説明せよ。

問四　傍線部D「「などえ上り給はぬ」と聞こえ給ひけれど」を、誰から誰への言葉かを補いつつ現代語訳せよ。

問五　傍線部E「殊なる事」とは、この場合どのようなことか、説明せよ。

第四問 次の文章は貞観（八五九～八七六）の末に白木の箸を市場で売っていた、身元不明、姓名不詳の老人についての伝承である。これを読んで後の問に答えよ（設問の都合上、返り点・送り仮名を省いた箇所がある）。（40点）

時ノ人号ス白箸翁ト。人皆相厭、不レ買ハ其ノ箸ヲ。翁自ラ知リテ之ヲ、不ニ以テ為サレ憂ヘト。寒暑之服、ハ皁色（注1）ニシテ不レ変ハラ。枯（注2）ニシテ木ニシテ其ノ形ヲ、浮ニシテ雲ニス其ノ跡ヲ。鬢髪（注3）ハ如クレ雪ノ、冠履（注4）ハ不レ全カラ。人如シ1問ヘバレ年ヲ、常ニ自ラ言フ二七十トニ。時ニ市楼ノ下ニ、有リ二売ルレ卜者ヲ、年可ニ八十ニ。密カニ語リテレ人ニ曰ハク、

「吾嘗テ為ル二児童之時、見ル二此ノ翁ヲ於路中ニ。衣服容貌、与レ今無シレ異ナルコト。」聞ク者怪ムレ之ヲ。疑フラクハレ其ノ百余歳ノ人ナリ。

A

然モ持スルコトレ性ヲ寛仁ナリ。未ダ曾テ見サ二喜怒之色ヲ。放誕（注5）慎謹、随ヒテレ時ニ不レ定マラ。人或イハ勧ムレバレ酒ヲ、不レ言ハ二多少ヲ、以テ二酔ヒ飽クヲ為スレ期トス。或イハ渉リテレ日ヲ不レ

2

食、亦無飢色。満市之人、不得量知其涯涘(注6)。後頓病終市門之側。市人哀其久時相見、移尸令埋於東河之東(注7)。

B

後及二十余年、有一老僧。謂人云、

「去年夏中、頭陀(注8)南山(注9)、忽見昔翁居石室之中、終日焚香、誦法華経。近相謁曰、『居士無恙(注10)。』翁咲不答。去亦相尋、遂失在所。」

3

C

D

（『本朝文粋』による）

（注）1　皁色――黒色。　2　枯木其形、浮雲其跡――体は枯れ木のようであり、行動は浮雲のようであったということ。
3　鬢髪――髪の毛。　4　冠履――冠とくつ。　5　放誕――勝手気まま。　6　涯涘――際限。
7　東河――京都の東を流れる鴨川をいう。　8　頭陀――修行する。　9　南山――吉野山から大峰にかけての山。

10　居士――仏教信者で、僧になっていない人。

問一　傍線部1～3の漢字の読みをひらがなで記せ。

問二　傍線部A「疑其百余歳人」とあるが、それはなぜか、説明せよ。

問三　傍線部B「不得量知其涯涘」とあるが、翁のどのような態度・様子に対しての感想か、次のア～オの中から**不適当なもの**を一つ選び、記号で答えよ。

ア　何日も食事を摂らなくても、全く平気な様子だったこと。
イ　人から酒を勧められると、全く酔うこともなく際限なく飲み続けたこと。
ウ　自由気ままかと思えば、慎重でもあり、人柄を計り知れなかったこと。
エ　自称七十歳とはいえ、実際には何歳であるか見当もつかなかったこと。
オ　箸を売ることを生業としていたのに、売れなくても意に介していなかったこと。

問四　傍線部C「見昔翁居石室之中、終日焚香、誦法華経」は「昔の翁の石室の中に居て、終日香を焚きて、法華経を誦するを見る」、と読む。この読み方に従って白文に返り点を付けよ。

問五　傍線部D「居士無恙」とあるが、この発言にはどういう意図が込められているか、説明せよ。

【国語A】

［解答用紙］

第四問

問四

《訂正前》　終日焚香誦法華経

←

《訂正後》　終日焚香、誦法華経

国語A　解答用紙　（二枚中　その一）

受験番号

得点

第一問

問一
1
2
3
4
5

問二

問三

問四

問五

問六

第二問

問一
1
2
3
4
5

問二

問三

問四

問五
(1)
(2)

問六

を守ろうとしたということ

という問い

国語A　解答用紙　（二枚中　その二）

受験番号

第三問

問一	問二		問三		問四	問五
1			B	C		
2						

第四問

問一	問二	問三	問四	問五
1 シ			見昔翁居石室之中、終日焚香誦法華経	
2 サ				
3 チ				

国語A正答例

第一問

問一　1　眺　2　分岐点　3　媒介　4　陳腐　5　形骸化

問二　あらゆる文章表現はできるかぎり均質でわかりやすいものであることが、ほとんど自明のこととされている今日の状況。

問三　様々な種類の文章において多様な文体がある状態。

問四　文章表現における近代性は表現の効率化を図ろうとする指向性に認められ、明治には多様な文体が乱立しながらも、その指向性が確認できるから。

問五　前近代の中でも近世は表現の均質化へとつながる印刷・出版技術が導入されたという点で、その当初から近代性を内包していたために、近世の次に近代を迎えたのは必然であったということ。

問六　オ

第二問

問一　1　喉　2　美貌　3　滅法　4　星霜　5　曖昧

問二　空の色が、高度が上がるに従い、茜色から次第に藍色が濃くなり、宵闇が迫っている情景

問三　己が悪しき人間かどうかという迷いの感情

問四　この家の所有者であるという立場

問五　（1）イ

（2）自分が悪人であると認めても許されないのか

問六　読者は、与根の視点に沿って、爺様が善人だという思い込みをもって読み進めていき、与根と共に実は爺様は悪人で自らそれを認めていたという意外性に向き合うことになる。

第三問

問一　1　大切に守り育て

2　意外で

問二　出で給ふたびごとには、女君に「法師になりに、山へまかるぞ」と聞こえ給ひければ

問三　B　女君が高光に、高光が出家したら死にそうなほど辛いという心情を伝えようとしたもの。

C　高光が女君に、あなたのことは忘れないと慰め気遣おうとする心情を伝えようとしたもの。

問四　「どうしてお上がりになることができないのですか」と愛宮が高光に申しあげなさったけれど

問五　出家するつもりだということ。

第四問

問一　1　も　　2　あらは　　3　たちま　チ

問二　八十歳くらいの占い師が、「昔、子供の頃、この老人を道で見かけた。衣服も容貌も今と変わっていない」と話していたので。

問三　イ

問四　見昔翁居石室之中、終日焚香誦法華経

下　二　一　レ　中　上

問五　眼前にいる人物が二十数年前に死んだ翁なのかどうか、確認しようとする意図。